〈論　文〉

「生命と算盤」の理念に基づく沖縄の産業振興策

――観光立国への試金石：辺野古崎・大浦湾――

金　子　龍太郎

1. はじめに

本論文の基本理念は，スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットの言葉「私は，私と私の環境である。そしてもしこの環境を救わないなら，私をも救えない」にある[1]。彼の思想は，人間と対立する自然という考えに立って，人間が自然環境を支配する，破壊する，保護する，優しくするといった西洋的思想ではなく，人間は自然界の一部であり，自然環境のもとで生かされているとする，親鸞聖人も唱えた東洋の「自然（じねん）」思想と軌を一にする。

次に本論では，温故知新を踏まえて渋沢栄一氏（1840年－1931年）と松下幸之助氏（1894年－1989年）の二人の偉大な経済人の提言に耳を傾ける。そして，都市再生の世界的なモデルとなったイタリアの都市ボローニャの精神，「過去と現在とは一本の糸のようにつながっている。現在を懸命に生きて未来を拓くには，過去に学ぶべきだ」を大切にしたい[2]。また，経済発展の目的は人々の幸せにあるはずである。その観点を見失わないためにも，「自分が生きている場所だけは大事にしよう。その場所さえしっかりしていれば，人はしあわせに生きていくことができる」というボローニャ精神を心に留めておきたい[3]。

さて，江戸時代末期から明治・大正・昭和初期にかけて，日本の資本主義の基盤を築き，500以上もの会社設立に関わった経済界の偉人渋沢栄一氏の精神が「論語と算盤」である。著書の中で渋沢氏は「算盤は論語によってできている。論語はまた算盤によって本当の富が活動される」[4]と述べている。そして，「富をなす根源は何かといえば，仁義道徳，正しい道理の富でなければ，その富は完全に永続することはできぬ。ここにおいて論語と算盤という懸け離れたものを一致せしめる」と続けている[5]。

次に，半世紀以上前の1953年（昭和28年）に，経営の神様と謳われた松下幸之助氏は「観光立国の弁」と題した論文で，我が国の自然景観を生かした観光業の振興について提言しており，本論の論旨は松下氏の弁に沿ったものとなっている[6]。

しかしながら松下氏の提言後も，我が国は相変わらず自然環境と生活環境を破壊しながら経済発展を遂げてきた。その代償に目を向けてみると，松下氏が絶賛した景観美は損なわれ，多くの生物が数を減らし絶滅し，生活環境が悪化して不幸に陥る国民は増加の一途である。本末転倒した産業展開を50年以上続けてきたからに他ならない。

この悪循環から脱却して，松下氏の唱える観光立国への試金石となる可能性を持つ，沖縄の豊かな自然が残る辺野古崎・大浦湾を舞台にして，具体的な産業振興策を提唱するのが本論文の目的である。

2. 渋沢栄一氏の「論語と算盤」に遡る

本論の題名「生命と算盤」は，日本の資本主義の父と謳われ，明治時代に日本で最初の銀行である第一国立銀行を初め，500以上もの会社の設立に関わり，主要産業を育成して日本の近代国家を導いた渋沢栄一氏が大正5年（1916年）に著した「論語と算盤」からとったものである。

渋沢氏は「道徳経済合一説」という理念を打ち出し，幼少期に学んだ論語を拠り所に倫理と利益

の両立を掲げ，経済を発展させて個人や会社が利益を独占するのではなく，国全体を豊かにするために，富を全体で共有するものとして社会に還元するように説いたのであった。また，道徳と経済は両立しないとの当時の経済界の趨勢に対して，次の言葉で答えている。「孔子の言わんと欲する所は，道理をもった富貴でなければ，むしろ貧賤の方がよいが，もし正しい道理を踏んで得たる富貴ならばあえて差し支えないとの意である」[7]と解して，金銭が卑しむべきものでないと主張したのである。論語（義・倫理）と算盤（利益）は両立するのである。

彼によれば，富をなす根源は何かと言えば，「仁義道徳」である。すなわち，正しい道理の富でなければ，その富は完全に永続することができないのである。続けて，一個人のみ大富豪になっても社会の多数が貧困に陥るようではいけない。一個人が富を積んでもその幸福は継続されないのであり，多くの国民が富を得るものでなければならないと主張した。

金銭が卑しむべきではなく，商工業者の盛んな経済活動があってこそ国が栄えると直観した渋沢氏は，信義にもとることは絶対にしないように自分を律するために論語が必要だと悟ったのだろう。そのため，彼は論語を忠実に伝えている陽明学に傾倒し，91年の生涯にわたって発揮した驚くべき行動力は，陽明学の教え「知行合一」を具現化したものであり，孔子の論語が時代を超えて経済界に必要だと改めて教えてくれる。

渋沢氏は実業界の中でも最も社会活動に熱心な人物で，東京市（当時）からの要請で児童から高齢者までの福祉施設，東京養育院の院長を60年の長きにわたって務めたほか，東京慈恵会，日本赤十字社，らい予防協会の設立などに携わり，財団法人聖路加国際病院初代理事長，財団法人滝乃川学園初代理事長，YMCA環太平洋連絡会議の日本側議長なども歴任した。中でも渋沢氏は，戦争のない世界を作ろうと様々な努力をした。第一次世界大戦後に設立された国際連盟（国際連合の前身）が成立したとき，各国に国際連盟を支援する民間組織である「日本国際連盟協会」を作った。さらに，1923年の関東大震災後の復興のための支援金集めに奔走したのであった。こうした業績を評価された渋沢氏は1926年と1927年のノーベル平和賞の候補にもなっている。

3. 生命尊重に基づいた経済発展 －松下幸之助氏の観光立国の弁

観光資源として，自然・文化・伝統の三つの要素は非常に重要となる。そして，それらは人間を含む地球上の生命体を尊重し，生命体としての人類が生きる自然環境と生活環境を大切に守ることにつながっていく。そして，生命尊重の具体的な表れが「美しさ」なのだと著者は考えている。

この点について，松下氏は4回にわたって欧米を旅行した後で，「自然の美しさでは，日本の地位は世界の一，二位ではあっても，決して，三位とは下るまいと感じたほどです」と日本の景観美を称えた上で，「こんな美しい景観の美を，日本人は今まで自国のみで独り占めしていたのです。考えてみればもったいない話で，石炭や石油ももちろん大事ですが，美しい景観もまた立派な資源だとすれば，むしろ日本の場合は，その重要さにおいていかなる埋蔵資源にも勝るとも劣らぬと言えるのではないでしょうか」[8]として，日本の美しい景観を観光資源ととらえたのである。

さらに松下氏は，「観光立国によって生み出されてくる最大の利益は，日本が平和の国になるということです。人間は誰も，美を愛し，文化を愛するようにできています。戦時中，あれだけひどい爆撃を受けましたが，アメリカは奈良を破壊しませんでしたし，京都も爆撃しませんでした。さすがのドイツもパリだけは破壊しなかったのです。スイスも戦火のただ中にあっていずれの国からも侵されなかったのです」[9]と述べ，観光業振興の目的が平和にあるのだと論じた。松下氏は，島国の小国で地下資源が乏しい日本にあって，美しい自然景観を生かした「観光立国は何も金儲けのためだけでやるのではありません。持てるものを他に与えるという博愛の精神からも，また国土の平和のためにという崇高な理念からも，堂々とこれを実行すべき唯一の立国方策なのです」[10]と将来への方向性を示している。他方，平和の対極にある戦争は，一部の人たちが自己の利益を強引

に推し進めるための手段として始めたものであり，大量殺戮や国土の破壊を行ってきたとも表現できよう。

松下氏は，その後1971年に次のように指摘している。「日本の国の文化，政治，経済その他すべてのものが，日本の豊かな自然風土の中で培われ，その好ましい影響を大なり小なり受けてきているのである。そうしたことを考えるとき，われわれは自然を大切にし，それを守ることに決してやぶさかであってはなるまい。自然を破壊するようなことがあれば，それは人間生活の，そして人間そのものの破壊にさえ結びつくと考えられるからである」[11]。

また，経済活動は社会の繁栄と人々の幸福を生み出すためのものであって，産業のために人間が存在するものではないと続けた。そして，「産業の発展は大切であるが，その発展が一方で自然を破壊し，人間の幸せを損なうような姿を生みだすならば，これは本末転倒にもなりかねない」から，産業は人間のためにあるという基本原則を守らなかった1960年代から1970年代には，公害という不幸な状況を招いたのではないだろうかと記している。その反省を踏まえて，これからは日本から公害をなくし，人々の健康を守ると共に，かけがえのない尊い自然を保護することに，すべての国民が心を定めて真剣に取り組んでいかねばならないと主張したのである。そして，「とりわけ産業界というか企業は，率先してそうした問題に積極的に力を注がねばならないと思う。それなくしてこれから先の企業の真の繁栄，発展は生まれてこないであろう。また，企業だけでなく政府や地方自治体においても，調和ある真の産業開発を進めるために正しい指導を行っていくことが必要だと思う」[12]と注文を出した。公害問題の本質は，たとえば水俣病に明らかなように，利潤を人の生命に優先させた経済至上主義の産物だったのである[13]。

こうした松下氏の提言を素直に受け入れて，沖縄の自然を大切にする方向での経済振興策を検討していきたい。

ところで，今日の我が国の公共事業を語る上で，田中角栄氏を抜きにできない。田中氏の多大な影響力が，50年以上の長きにわたって，我が国の公共事業を方向付けたのである。新潟県の田舎の農家の生まれで，若くして土建業の社長となった田中氏は，冬季には雪に閉ざされる新潟の人々の生活・暮らしを良くしようという志を持って政治家に転身して，多くの公共事業を実施して，新潟の人々から感謝される存在であった。その一例を1947年（昭和22年）の初出馬時の街頭演説で示そう。

「みなさんッ。この新潟県と群馬県の境にある三国峠を切り崩してしまう。そうすれば，日本海からの季節風は，太平洋側に抜けてしまい，越後には雪は降らないッ。みなが，大雪に苦しむことはなくなるのであります。切り崩した土砂？土砂は日本海に持っていく。日本海を埋め立てて，新潟と佐渡を陸続きにさせてしまえばええのであります！」[14]

その後，田中氏が政治的影響力を強めるに至って，「日本列島改造論」を著し，全国各地で道路，橋，鉄道，ダム，そして建物の公共工事を推し進めていった。その一例を同じく街頭演説で示す。

「戦後ダムがどれくらいできたかというと，これが千三十三カ所ッ，現在建設中のものが五百四十二カ所ある。さらに，これから建設を必要とするものが，約五百六十ッ。まァねェ，私が昭和三十年に治水十ヵ年計画の会長をやったとき，大蔵省は昭和六十年までに百五十カ所のダムをつくればいいと言ったが，私は千五百カ所の予算要求をしたんだ（笑）。ために，土方代議士なんて言われたッ（大爆笑）」[15]。

その後もダム建設は続き，2011年現在，建設中と調査中のダムを含めると3000か所を超えている。

こうした現状に対して，オランダ人ジャーナリストであるウォルフレン氏は「ダムやトンネルなどの建設計画によって，残された貴重な自然を破壊している。日本の納税者は，建設工事がいかに行き当たりばったりのでたらめに近いやり方でお

こなわれているか充分に認識していない」[16]と指摘し，「本当に必要な社会資本の整備は計画さえたてられない一方で，政治的な理由による不要不急の工事が日本の風景を醜く換えている」[17]と述べている。狭い日本国内で無限に建設工事を続けられるはずがないし，大きな自然破壊をもたらしてきたが，数十年間公共事業の転換がなされなかった。

ところで，著者の故郷は瀬戸内海に浮かぶ小島で，小さな島から日本の公共事業を見続けてきた。松下氏が「人類共通の大きな資産であり，天与の尊い宝物」[18]と絶賛した瀬戸内海国立公園の自然景観は，埋め立てや大型公共事業に使用される海砂の採取により大きく破壊された。加えて，この10年の間に島と島を結ぶ橋が次々とでき，2008年には本州と連結して，車で移動・運搬できるようになった。しかしながら，基幹産業のミカン作りは衰退の一途をたどり，農家の後継ぎはほとんどおらず，中学時代の同級生約150名のうち，島に残っているのは1割にも満たない。その結果，15万人以上の全国都市のうちで高齢化率がもっとも高い28.2%（2009年）に達している呉市にあって，故郷の島は56%（2008年）を超える高齢化率の町になってしまった。架橋後は，航路が次々廃止になって自動車を運転できない高齢者にとっては不便になり，本州から車で人が来ることで治安が脅かされる弊害が出てきた。著者の実家の両隣では，初めて空き巣の被害に遭った。

今日では，必要以上に立派な建物を作ってきた公共事業の維持管理費が自治体財政を圧迫している点から，「箱もの行政」が批判されているが，それと同様に，巨額の税金を投入しても地域の発展に結びつかず，さらに自然を大きく破壊する道路建設や橋の建設を著者は「道もの・橋もの行政」と称して，再考すべきだと考える。傷つけられてきた地球の声や地元住民の声に耳を傾ける必要性を痛感する。

この点について松下氏は「産業開発は確かに大事であり，また経済性の点から瀬戸内海地方は産業開発に適してはいようが，やはり自然との調和を失ったときには，産業開発によって得られるプラスよりも，それによって失うマイナスのほうが，はるかに大きいということははっきりいえるように思う」[19]と語り，失われつつある自然を守り取り戻すことに，何よりも力を注いでいかねばならないと40年前に論じたのであった。

その一方で著者は，帰省の際，明石海峡大橋を通るたびに，先端技術の粋を集めた世界一の大橋を建設された方々に畏敬の念を抱く。日本の土木建設の技術は世界有数である。そうした技術力で日本の交通インフラは随分整備され，今後も地方の交通事情を改善するための公共事業は不可欠である。しかしながら，永続的に作り続けるわけにはいかない。世界に誇る技術力と人材を他の領域で生かす道を探ることが今後求められる。

これまでの，自然を破壊する仕事から転換して，自然を守り自然の中に生かされて，自然を豊かにする仕事で生計を立てられるよう，日本社会が変わっていくのを願っている。

4. 国の天然記念物ジュゴンの世界棲息最北端：辺野古崎・大浦湾

ジュゴンは，人魚のモデルとして知られる海棲哺乳類で，海草（うみくさ）しか食べない（海の牛＝海牛ともいう）。現在では生息数が激減して絶滅危惧種に指定されていて，名護市指定天然記念物で国の天然記念物でもある。世界のジュゴンの分布北限は沖縄の辺野古崎・大浦湾であり，付近の海域にわずか50頭未満のジュゴンしか生息していないと推測され，これ以上生息環境が悪化すれば，日本のジュゴンは絶滅する可能性が高い。そして，この海域は，サンゴ礁に囲まれた水深2〜3 mの浅瀬「イノー」が広がっていて，ジュゴンの食物である海草類が広範に生えている。海草は，水深が浅く，海水がきれいで海底にまで太陽光線が届く場所にしか生えず，海草の生えた藻場は「海のゆりかご」と称されており，海洋生物の産卵場や稚魚の生育場として大変重要である。加えて，大浦湾に注ぎ込む大浦川と汀間川にはマングローブ林（メヒルギ，オヒルギ）が広がっていて，富栄養分を海へ供給して，多数の生物が棲息する干潟を形成しており，環境省の「日本

の重要湿地 500」に選定されている[20]。

ジュゴンが生息する辺野古・大浦湾は生命溢れる恵みの海で，国内最大級のアオサンゴと塊状ハマサンゴ群落があり，ウミガメも生息していて，海鳥のアジサシの繁殖地もある。辺野古崎・大浦湾の生態系の価値を認識している人々は世界中に多く，日本の団体と協働したアメリカの自然保護団体が，辺野古・大浦湾のジュゴン保護訴訟を起こすなどの活動をアメリカ国内で進めている。

沖縄の人々が信仰してきた祖先神は，海のはるか彼方の「常世の国：ニライ・カナイ」にいて見守って下さっている。神々が海から来られる時，陸地に降り立つ前にひと休みする場所がイノーや湾内の島々であり，大浦湾の複数の島は人々の信仰の場として大切に守られている。

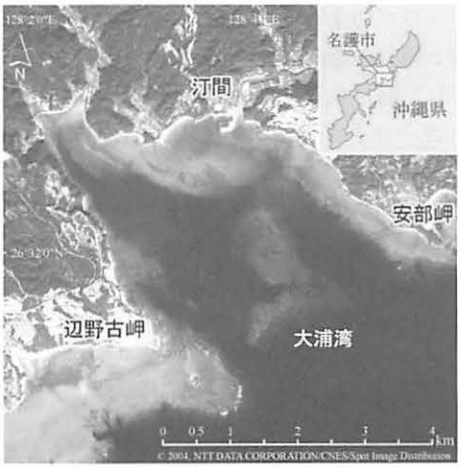
辺野古・大浦湾の自然の豊かさは，生物多様性の高い沖縄の中でも有数であり，この自然を将来にわたって守ることは，生物多様性保全の試金石といえるのである。沖縄の人々は，これまで豊かな海の恩恵，すなわち生物の多様性の恩恵を受けて暮らしてきた。したがって，沖縄の人々はそのような自然を良く知り，長年にわたって自然を損なわずに利用してきた。この，日本でも有数の生物多様性を誇る辺野古・大浦湾で今必要なことは，埋め立てなどによって自然を失うような開発ではなく，今ある自然を守り，将来にわたって自然と人間が共生していくための地域づくりなのである[21]。

サンゴ礁の価値を数値で示すと，国連環境計画（UNEP）は 2006 年 1 月にサンゴ礁 1 km² は年間 60 万ドル（約 4800 万円）の価値があると試算した[22]。天然の護岸，魚介類を育む機能，観光資源としての価値が数値化されたのであるが，辺野古の新基地建設計画では本体の埋め立て面積は 160 ha（1.6 km²）で，失われるサンゴ礁の損失は，毎年約 8000 万円にのぼる。

こうした価値の高い辺野古崎・大浦湾が基地移転先に指定されたのには訳がある。すなわち，日本の海岸線のうち，漁業権が設定されず基地を沖合に建設できる海は，実は辺野古崎・大浦湾だけである。天然記念物のジュゴンの生息地だから漁業が禁止されていたために，漁業権が発生しなかった。辺野古の漁業関係者は沿岸部ではなく沖合での漁を行っていて，埋め立てられる予定の海域は漁業権がない場所であり，埋め立てによる漁業補償が不要の場所だったのである[23]。他の海域を埋め立てるとなると，補償だけで 1 兆円を下らないと言われている。

著者は，2011 年 10 月 28 日～30 日に沖縄を訪問して，沖縄県庁，名護市役所，沖縄国際大学，辺野古ヘリ基地反対協議会を訪れた。ヘリ基地反対協議会の好意で船に乗せていただき，辺野古崎

図 1　辺野古崎・大浦湾の地図



出所：http://www.wwf.or.jp/activities/marine/lib/0904ooura.pdf
大浦湾の水深は深いところで 50 m 以上（濃い色）あるのに対して，辺野古岬沖では数 m しかなく（薄い色），複雑な海底を形成していて，生物多様性を保持していることが分かる。

図 2　沖縄の海の生物多様性と人の暮らし



（(財)日本自然保護協会会報「自然保護」, No.506 より）
出所：http://www.wwf.or.jp/activities/marine/lib/0904ooura.pdf

の海をつぶさに眺められた。船上からはキャンプ・シュワブの全容をうかがい知れた。そして，ジュゴン棲息の象徴の場である「ジュゴンの見える丘」に二回足を運んだ。この場所は，沖縄出身のシンガーソングライター Cocco がジュゴンを見るために何度か訪れているそうだ。2007 年，大浦湾の入り口で泳ぐ 2 頭のジュゴンの姿を琉球朝日放送が 6 月 21 日のニュースで放映し，Cocco はその姿に魅入った。Cocco は涙と鼻水でグシュグシュになりながらも，数時間のうちに「ジュゴンの見える丘」を制作したそうである。2007 年の 7 月 7 日，地球温暖化防止を訴えるイベント Live Earth に出演した Cocco は，「戻ってきてくれたジュゴンに，一生かけて向き合わなければならないと思いました」と語り，「ジュゴンの見える丘」を歌い上げたのである。基地問題の複雑さをふまえた上で，なお沖縄の海を守りたいと歌う Cocco のメッセージを著者なりに受け止めたいと考えて，「ジュゴンの見える丘」に足を運んだ次第である。

ここで，Cocco の曲の中で，最も具体的な環境保全のメッセージ性を持つ歌「ジュゴンの見える丘」を紹介する。

2007 年 7 月 7 日の Live Earth コンサートで次のように語る Cocco だった[24]。

「沖縄の女なので，少し沖縄の話をします。沖縄の海はまだ美しく見えます。ジュゴンなんか見たことない人が付けた『ジュゴンの見える丘』っていう丘から臨む海はまだとても美しくみえます。その海にアメリカ軍のヘリポート移設が決まって，国はもう着工のために海底調査機を入れて，もう乗り出してます。

どんなに，どんなに声を上げても拒絶しても，諦めなきゃいけないことがある，どっかで覚悟しなければならないと思い始めていて，それで，かといって沖縄の人が全員そのヘリポートの移設を反対しているかというと，そうじゃない事実もあって，アメとムチの，ヘリポートがムチだったら，アメっていう施しを受けている大人の政治があることも事実で，そうじゃなくても，私たち人間がぶち壊してきた尊いものが一杯そこにあって，それを無くして失ってから悔いて，泣くしかないのかなあと思う毎日でした。

写真 1　ジュゴンの見える丘から大浦湾を望む



写真 2　ジュゴンの主食の海草リュウキュウアマモ



でも，先月その海にジュゴンが帰ってきました。ちょうどそのヘリポート移設の海の，ちょうど国が設置した海底調査機の真上の，バカみたいにきれいな海の上にジュゴンが二頭泳いでいる姿が映像に収められて，そのニュースは沖縄中に駆け巡りました。

今まで，自分は政治家じゃないし，歌うたいだから，分からないけど歌うしかないと多分やってきたけど，でも 6 月 23 日の慰霊の日にジュゴンの祈りみたいなあの時，コ（Cocco の愛称）たちは何も守れなかったし何もしてあげられなかったし，ぶち壊してきただけなのに，それでも戻ってきてくれたジュゴンに，コは一生かけて向き合っていかないといけないと思いました。

たぶん，そのジュゴンのニュースが内地でどれだけ流れたかは知れないけど，とっても美しいジュゴンでした。こんなよ。公共の場で，しかも人様のイベントで，こんな沢山の人がいるところ

で，でも今日はわがままに歌わせてほしいと思い　いです」。
ます。次の曲をあのジュゴンのためだけに歌いた

ジュゴンの見える丘

Cocco（詩・曲・歌）（2007年）

まだ青い空　まだ蒼い海　終りを告げるよな　真白色
泣きたかろうに　引き受けた夢　しゃらしゃら珊瑚　声も上げずに
もういいよ　目を閉じていい　もういいよ　少し　おやすみ

悲しみは　いらない　やさしい　歌だけでいい
あなたに　降り注ぐ全てが　正しい　やさしいになれ

色とりどりに　煌めく世界　継いで接（は）いで連（つら）ね　恥さらせ
どこへ向かうの？　泣き疲れても　名も無き花は　咲いてくれよう
目を開けろ　帰ってきたよ　目を覚ませ　信じてほしい

悲しみは　いらない　やさしい　歌だけでいい
あなたに　降り注ぐ全てが　正しい　やさしいになれ

もういいよ　目を閉じていい　もういいよ　少し　おやすみ
笑っていてほしい　守るべきものたちに
明日も訪れる何かが　正しい　やさしいであれ

悲しみは　いらない　やさしい歌だけでいい
あなたに　降り注ぐ全てが　正しい　やさしいになれ

正しい　やさしいになれ　正しい　やさしいであれ

さて，ジュゴン訴訟とは2003年，新基地建設の米軍側の責任を問うために，沖縄のジュゴンと地域住民，そして日米の環境保護団体が原告となり，米軍国防総省・国防長官を被告として，サンフランシスコ連邦地裁に提訴した裁判である。連邦地裁は2008年1月23日に，米軍がジュゴンへの配慮を欠き米国文化財保護法に違反すると指摘し，被告の米軍国防総省・国防長官にジュゴンの保護策を示せとの中間判決を下した。こうして，米軍がジュゴンに直接的な影響を与える事業は，米国の法律により事実上制約されている。そして，控訴審も争われる間はキャンプ・シュワブの敷地に基地は建設できないという。なぜなら，米政府と米軍は米国司法の判断に縛られるからである。

現行計画の代替ヘリポートは，日本政府が建設してアメリカ軍の海兵隊に供用することになっていて，米国の判決が直接，日本政府の行為を縛るわけではないが，計画が米軍キャンプ・シュワブの敷地と基地として提供された海域を使うため，日本政府が建設を実行するには米政府・米軍の許可が必要となるが，ジュゴン訴訟によって，この許可が出ないのだ。万一，政府が基地移転を決定して埋め立て工事に着手すれば，ジュゴン訴訟原告団はただちに米連邦地裁に工事の差し止め請求を行う構えだ[25]。

ここで強く主張したいのは，ジュゴンの保護により，沖縄の美しく豊かな海という観光資源を守

り，水産資源の保全につながる。それにより，持続可能な産業である観光業・漁業を振興して，地元住民が辺野古地区で生計を立てる道筋が残り，子々孫々まで永続的な経済基盤を保持できるのだ。従って，辺野古崎・大浦湾の生態系の象徴であるジュゴンの保護は，観光立国の試金石なのである。

これに関して，辺野古への基地移転を反対する数少ない国会議員の一人である小沢一郎氏は，週刊誌の対談（2011 年 11 月）で次のように語っている[26]。

「僕は，いつでも米国とケリをつけられると思っています。あの沖縄のサンゴの海を埋め立てるなんてバカげたことをする必要はない。普天間（に駐留する米軍）の必要はないですよ。前線から実戦部隊を引くのが米国の軍事戦略の基本。欧州からも兵力を引いている。米軍が引くと中国の軍事力にやられるというのは一面の事実ですが，日本が『こういう役割を果たすから，この部分はいなくていい』と言えないことこそが問題ですね。沖縄は日本の国土ですから日本が守るのは当たり前。3 K（きつい，汚い，危険）はやらずにカネさえ出していればいいという感覚だから，米国人にバカにされちゃう」。

5. 沖縄の歴史と文化

琉球王国は，1429 年から 1879 年にかけて沖縄本島を中心に存在した王国で，当時，正式には琉球國と称した。最盛期には奄美群島と沖縄諸島及び先島諸島までを統治したが，勢力圏は小さな離島の集合で，総人口 17 万に満たない小さな王国ではあった。中国の明，及びその領土を継承した清の冊封を受けていたが，1609 年に日本の薩摩藩の侵攻を受けて以後は，薩摩藩による実質的な支配下に入った。その後，1853 年に黒船が那覇に来航し，ペリー提督が首里城に入って開港を求めた。幕府は琉球の開港を許可したが，その際，ペリー提督は琉球が武力で抵抗した場合には占領せよと大統領から許可されていた。1871 年，明治政府は廃藩置県によって琉球王国の領土を鹿児島県の管轄としたが，1879 年の琉球処分により沖縄県が設置され王族の支配は終わった[27]。

その後も，第二次世界大戦で日本唯一の地上戦が展開された地となり，自然環境と生活環境は徹底的に破壊されてしまった。敗戦後は，アメリカ軍が全島を占領して，広大な基地を建設していった。そのため，戦前の基幹産業だった農業は壊滅的な打撃を受けた。戦前の沖縄は島全体の 8 割が農業に従事する農業県だったが，沖縄戦による農地や生産基盤の破壊に加え，米軍占領下で家屋を壊され，土地を奪われて，基地に依存しなければ生きていけない基地依存経済に強制的に組み込まれた。2010 年現在，就業人口に占める農業就業者は 5.5% にまで減少し，製造業や建設業など第二次産業就業者が 16.7%，米軍基地や公務・商業など第 3 次産業就業者が 77.5% を占める構造となってしまった[28]。

2009 年 3 月末現在，沖縄県内には 34 の米軍基地があり，総面積は 23,293 ha で，沖縄本島の 18.4% を占めている。日本にある米軍基地総数の 25.2%，基地面積の 22.7% が沖縄に集中してい

写真 3　辺野古沖からキャンプ・シュワブを望む



写真 4　キャンプ・シュワブと隔てるフェンス



る。中でも，米軍専用の基地は38.8%が沖縄に集中し，面積では73.9%にも上る。日本全体の総面積のわずか0.6%にすぎない沖縄県に，米軍専用施設の74%が集中するアンバランスと，在日米軍兵力（35,965人）の68.4%（24,612人）が沖縄に駐留し，中でも戦争時には最前線で活動を展開する海兵隊の88.6%（14,958人）が沖縄に集中している[29]。

確かに，沖縄の人々は基地に依存した暮らしを続けているが，今日では米軍基地は沖縄の経済を蝕む存在だと認識できるのであり，今後は米軍基地のない沖縄で生きる方向をめざすべきである[30]。

これまで，沖縄県民は非常な苦痛と忍耐を強いられてきた。Coccoは次のように語る。

「日本の抱える米軍基地の70%以上があの小さい島にあります。その70%の基地とやっていくためには，あっちゃん（Coccoの愛称）たちは受け入れてあきらめなければいけないことが一杯ありました。あっちゃんたちのパパもママもそれができたから，あっちゃんたちはあきらめることに慣れていって，でもそれを悲観的にとってたら悲しいから，それをどうやって明るくもっていくかにみんな全力を注いで，明るく笑ったり歌ったり三線弾いたりしてるけど・・・」[31]。

基地以外に産業らしき産業を持たない沖縄市では，基地経済の縮小とともに中心市街地は県内有数の『シャッター通り』となり，基地を解雇された従業員らは職を失った。また，1995年の米兵による少女暴行事件や，2004年に起こった普天間基地に隣接する沖縄国際大学への米軍ヘリ墜落事故などにより，基地反対の機運が一気に高まったが，その後は基地返還に結びつくような大きな動きがないまま推移して，今日に至っている。

今後の沖縄の経済をどのように発展させるかに関して，農林水産業や製造業などの振興を抜きに，サービス業中心の「基地経済」構造を温存させたままでは，日本政府がいくら沖縄の経済的自立を促す振興策と予算を投入しても，沖縄の産業振興は困難なのである。米軍基地に土地を提供するよりも，返還させて民間で活用した方がはるかに経済効果は上がる。基地返還後の，北谷町のハンビー飛行場，うるま市の天願通信所のその後を見れば良く分かる[32]。

次に，蹂躙され続けた沖縄の文化について，沖縄芝居の第一人者で古典芸能（組踊）の国指定保持者だった故真喜志康忠氏の著書で見てみよう。真喜志氏によれば，沖縄と沖縄方言，さらに沖縄芝居が明治の廃藩置県以降たどってきた命運を同時に透写しているという。

「思うに沖縄芝居は発足当時から，方言芝居なるがゆえに，妙な限界・暗い宿命を背負わされてきた感じがする。そのため進歩した同郷人からは，絶えずとかくの批判を浴び，芝居小と卑しまれてきた」[33]。

沖縄芝居は，沖縄が日本に併合され，日本人になる過程（大和化）で，方言芝居ゆえに，特に当時のインテリ層（学者，役人，ジャーナリスト，教育者）から目の敵にされたと真喜志氏はもらしたが，それは沖縄方言を学校や公的な場で使うことを固く禁じた事実からも容易に想像がつく。

「沖縄ぐち（方言）は沖縄常民の心の根であり，その沖縄の心情を忘れたら，沖縄の魂は糸の切れた凧のように浮遊する」[34]

「ところが，昨今は，芝居も見ないで，方言も碌に喋れない物書きの先生たちが，知識や学問の理屈で沖縄芝居を論ずるから，そういう批判に対して，残念ながら老優は答える知識がないものだから，もっぱら年のせいにして，組踊からも沖縄芝居からも遠ざかっていたが，『この道を泣きつつわれの行きしごと　われ忘れなば誰か知るらむ』」[35]。

日本本土から遠く離れた島である故に，数百年間侵略と戦争に翻弄され，沖縄の歴史と文化は破壊されてしまい，今日まで本土とは明らかに差別された県となっている。

以上の歴史に思いを馳せれば，今後の沖縄県の

産業振興策を検討する際には，沖縄の歴史・文化・自然すべてに目を配る必要があるだろう。ここで，沖縄出身の音楽ユニットである BEGIN の代表曲「島人ぬ宝」の歌詩を心に留めておこう(36)。

島人ぬ宝（しまんちゅぬたから）

BEGIN（詩・曲・歌）（2002 年）

僕が生まれたこの島の空を　僕はどれくらい知ってるんだろう
輝く星も　流れる雲も　名前を聞かれてもわからない
でも誰より　誰よりも知っている
悲しい時も　嬉しい時も　何度も見上げていた　この空を

教科書に書いてある　事だけじゃわからない
大切な物がきっと　ここにあるはずさ
それが島人ぬ宝

僕が生まれたこの島の海を　僕はどれくらい知ってるんだろう
汚れてくサンゴも　減って行く魚も　どうしたらいいのかわからない
でも誰より　誰よりも知っている
砂にまみれて　波にゆられて　少しずつ変わってゆくこの海を

テレビでは映せない　ラジオでも流せない
大切な物がきっと　ここにあるはずさ
それが島人ぬ宝

僕が生まれたこの島の唄を　僕はどれくらい知ってるんだろう
トゥバラーマも　デンサー節も　言葉の意味さえわからない
でも誰より　誰よりも知っている
祝いの夜も　祭りの朝も　何処からか聞えてくるこの唄を

いつの日か　この島を離れてく　その日まで
大切な物をもっと　深く知っていたい
それが島人ぬ宝

6. 辺野古崎・大浦湾における具体的な産業振興策

まず全体的な視点として，山間部の森林を整備し（林業），田畑の耕作により荒れた土地をなくし（農業），河口付近のマングローブ林の植樹を進め，栄養に富んだ河川の水が大浦湾に注ぎ込むようにして，海産資源を豊かにする（水産業）ことを通して，第一次産業の基盤を確固たるものにする。すなわち，山・森→田畑・河川→河口・海までのエコシステム全体の保全なのである。その上に，第二次産業と第三次産業の振興をもたらすのである。現地の山林は，長年にわたって薪にするために木々の伐採が繰り返されてきたが，この数十年は放置されたままの山が多く，木々は密生して生えて適度の伐採が必要となっている。ま

た．一部の地域では，農地の開拓やリゾート開発で森林が伐採された裸地から赤土が海に流出するという問題もある[37]。

辺野古崎・大浦湾の生態系を豊かにするための具体例を挙げると，「海のゆりかご」のアマモの増殖を公共事業として進めることを提案する。すでに複数の大手建設会社が，沖縄の豊かな生態系の形成に不可欠なアマモ増殖に取り組んでいる。まず，大成建設は天然のアマモ場にダメージを与えることなく，アマモの自然繁殖力を利用して簡易にアマモ場を再生する方法[38]，続いて，鹿島建設は人工的に育成されたアマモを海に戻すための移植用基盤の開発[39]，五洋建設は浚渫土を用いた播種材料を開発し，種子からのアマモ場造成[40]，そして東洋建設は2004年日に海草増殖基盤の特許名で特許を出願した[41]。さらに，独立行政法人科学技術振興機構と大成建設株式会社は「アマモ場の造成方法」の国内特許を申請している[42]。

アマモの増殖方法として，移植法，株植え法，および播種法の開発が進み，効率的にアマモ増殖が可能な技術が開発されているのである。こうした中，水産庁は2001年から，日本水産資源保護協会に委託して，海草藻場を造成・再生するための技術開発を進めている。以上，豊かで美しい大浦湾の生態系保全とアマモ増殖を公共事業として積極的に推進するのである。

そして，インフラ整備として，観光客のアクセス利便性を向上させるために空港と港の再整備を行う。続いて，サンゴ礁，ジュゴン，クジラ，ジンベイザメなどの海洋生物ウォッチングなどのマリン・レジャー基地の整備と船舶の運航を行う。陸地では，観光客増加に備えて道路整備，駐車場の増設，宿泊・飲食施設の開業などを行っていくのである。これらのハード面を整備した上で，沖縄舞踏や沖縄音楽，および長寿に結びつく沖縄料理など，沖縄独特の観光コンテンツを国内外の多くの人々が知り，楽しんでもらいたいと祈念する。

7. おわりに

海草藻場を増やしてジュゴンを保護する公共事業は，沖縄の美しく豊かな海という観光資源を守り，水産資源の保全につながる。それにより，持続可能な産業である観光業・漁業を振興して，地元住民が辺野古地区で生計を立てる道筋が残り，子々孫々取り組んでいける。そして，将来にわたって土木・建設業界には観光インフラ整備という新たな事業展開が生まれるのである。数十年単位で事業を継続する持続的展開のためには地元業者の参入が欠かせない。そのため，小規模・中規模の公共事業の予算措置を地元自治体に実現してもらいたい。沖縄の人に限らず，生まれ育った故郷で，あるいは嫁いで後半生を過ごした第二の故郷で，子や孫に見守られながら生涯を終える時，人間としての幸せを感じるであろう。

現在の日本に生きる我々が日本の未来を拓くために，半世紀以上前に“経営の神様”が残して下さった弁を素直に受け入れよう。将来にわたる日本国の“経営”を観光業によって立て直せるか否かの試金石が沖縄県辺野古崎・大浦湾なのである。

ところで，大学生時代に理学部生物学科で動物生態学（環境生物学）を専攻した著者は，2009年の政権交代後に，時の内閣総理大臣が普天間基地の沖縄県外移転を明言した際，辺野古への基地移転問題について調べ，辺野古に基地を作るべきではないとの結論に至った。しかしながら，事態は振り出しに戻り，日米両政府が辺野古移転を強硬に進め始めた2010年には，著者は辺野古をあきらめた。そうした中，2010年にシンガーソングライターCoccoが純粋，かつ悲壮な訴えをしているのを知った。彼女がたった一人で，ジュゴンの棲む海を守ろうとする姿を見た私は，彼女から何とも言えない，・・・勇気をもらった。再び，辺野古の海と沖縄の生きとし生けるものたちに目を向けて行こうと・・・。

その道筋は，すでに人生の先輩が示して下さっている。老ジャーナリストむのたけじ氏（2011年現在96歳）の言葉を最後に示す。

「人類，一人一人が自分を変えて，自分の進むべき道を進む。六十億全員がそうした，その時には人類は変わっていくと思う。それ以外には人類に活路はないのだ」[43]。

注

(1) オルテガ・イ・ガセット（1914年）「ドン・キホーテをめぐる思索」佐々木孝（訳）（2011年オンデマンド版）未来社 p.65

(2) 井上ひさし（2008年）「ボローニャ紀行」文藝春秋 p.214

(3) 井上ひさし（2008年）「ボローニャ紀行」文藝春秋 p.144

(4) 渋沢栄一（1985年）「論語と算盤」（初出：1916年）国書刊行会 p.1

(5) 渋沢栄一（1985年）「論語と算盤」（初出：1916年）国書刊行会 p.22

(6) 松下幸之助（1999年）「観光立国の弁」：初出「文藝春秋」1954年5月号）「遺論・繁栄の哲学」p.110–119. PHP研究所

(7) 渋沢栄一（1985年）「論語と算盤」（初出：1916年）国書刊行会 p.91

(8) 松下幸之助（1999年）「観光立国の弁」：初出「文藝春秋」1954年5月号）「遺論・繁栄の哲学」p.110–119. PHP研究所 p.111–112

(9) 松下幸之助（1999年）「観光立国の弁」：初出「文藝春秋」1954年5月号）「遺論・繁栄の哲学」p.110–119. PHP研究所 p.118

(10) 松下幸之助（1999年）「観光立国の弁」：初出「文藝春秋」1954年5月号）「遺論・繁栄の哲学」p.110–119. PHP研究所 p.118

(11) 松下幸之助（1999年）「美しい日本への決意を」：初出「PHP」1971年2月号）「遺論・繁栄の哲学」p.268–278. PHP研究所 p.269–270

(12) 松下幸之助（1999年）「美しい日本への決意を」：初出「PHP」1971年2月号）「遺論・繁栄の哲学」p.268–278. PHP研究所 p.277

(13) むのたけじ（2003）「むのたけじ 現代を斬る」イズミヤ出版 p.188

(14) 小林吉弥（2003年）「田中角栄の人を動かすスピーチ術」講談社 p.83

(15) 小林吉弥（2003年）「田中角栄の人を動かすスピーチ術」講談社 p.91–92

(16) カレル・ヴァン・ウォルフレン（1994年）「人間を幸福にしない日本というシステム」篠原 勝（訳）毎日新聞社 p.97

(17) カレル・ヴァン・ウォルフレン（1994年）「人間を幸福にしない日本というシステム」篠原 勝（訳）毎日新聞社 p.99

(18) 松下幸之助（1999年）「美しい日本への決意を」：初出「PHP」1971年2月号）「遺論・繁栄の哲学」p.268–278. PHP研究所 p.271

(19) 松下幸之助（1999年）「美しい日本への決意を」：初出「PHP」1971年2月号）「遺論・繁栄の哲学」p.268–278. PHP研究所 p.272

(20) 国立公園協会（編）（2011年）「ジュゴンの棲む海 久志十区の海と自然」環境省

(21) ヘリ基地反対協議会 http://www.mco.ne.jp/~herikiti/tachiba.html（閲覧：2011年9月18日）

(22) ヘリ基地反対協議会 http://www.mco.ne.jp/~herikiti/tachiba.html（閲覧：2011年9月18日）

(23) 岡本呻也「人間力」パワーアップ講座 「辺野古の住民と基地の関係は良好だった」http://www.nin-r.com/intr/ashikawa03/02.htm（閲覧：2011年12月4日）

(24) Cocco「ジュゴンの見える丘」Live Earth コンサート（2007年7月7日）http://www.youtube.com/watch?v=TwA-e3d-3qA 閲覧：2011年4月30日）

(25) グリーンピース・ジャパン「辺野古の基地建設は不可能・不必要！？」http://www.greenpeace.or.jp/info/staff/jun.hoshikawa/monthlist_html?year=2009&month=12（閲覧：2011年10月7日）

(26) 小沢一郎（2011）「小沢一郎 すべてを語る」『サンデー毎日』2011年11月27号 p.21

(27) 琉球王国 Wikipedia http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%90%89%E7%90%83%E7%8E%8B%E5%9B%BD（閲覧：2011年12月5日）

(28) 前泊博盛（2010）「『基地依存経済』という神話－米軍基地は沖縄経済を蝕むパラサイト－」『世界』2010年2月号「普天間移設問題の真実」p.203–210 岩波書店 p.206

(29) 沖縄の米軍及び自衛隊基地（統計資料集）（2010）http://www3.pref.okinawa.jp/site/view/contview.jsp?cateid=14&id=21830&page=1（閲覧：2011年12月3日）

(30) 前泊博盛（2010）「『基地依存経済』という神話－米軍基地は沖縄経済を蝕むパラサイト－」『世界』2010年2月号「普天間移設問題の真実」p.203–210 岩波書店 p.203

(31) Cocco（2008）DVD「大丈夫であるように」ビクターエンタテインメント

(32) 前泊博盛（2010）「『基地依存経済』という神話－米軍基地は沖縄経済を蝕むパラサイト－」『世

界」2010年2月号「普天間移設問題の真実」p.203-210　岩波書店 p.207

(33) 真喜志康忠（2002）「沖縄芝居と共に－老役者の独り言－」新報出版 p.202

(34) 真喜志康忠（2002）「沖縄芝居と共に－老役者の独り言－」新報出版 p.203

(35) 真喜志康忠（2002）「沖縄芝居と共に－老役者の独り言－」新報出版 p.20-21

(36) BEGIN－　島人ぬ宝（2002年）（一五一会ヴァージョン）
http://www.youtube.com/watch?v=b4qpo6kVxwo（閲覧：2011年12月15日）

(37) 国立公園協会（編）（2011年）「ジュゴンの棲む海　久志十区の海と自然」環境省

(38) 大成建設「干潟・藻場造成による水域環境再生技術」
http://www.taisei.co.jp/giken/topics/1196408576695.html（閲覧：2011年12月3日）

(39) 鹿島建設「海のゆりかご・アマモ移植用基盤」
http://www.kajima.co.jp/tech/material/eco/amamo/index.html（閲覧：2011年12月3日）

(40) 五洋建設「アマモ場造成技術」
http://www.penta-ocean.co.jp/business/tech/environment/beach/amamo.html（閲覧：2011年12月3日）

(41) 東洋建設「アマモ場造成技術　播種シート法」
http://www.toyo-const.co.jp/toyo/topics/tech/index.html（閲覧：2011年12月3日）

(42) 独立行政法人科学技術振興機構・大成建設株式会社「アマモ場の造成方法」国内特許：2011年6月21日
http://jstore.jst.go.jp/nationalPatentDetail.html?pat_id=24979（閲覧：2011年12月3日）

(43) むのたけじ（2003）「むのたけじ　現代を斬る」イズミヤ出版　p.184

参考文献

Cocco（2008）「想い事。」毎日出版

日本水産資源保護協会（2007年）「沖縄の海草藻場」水産庁

大谷まこと（2011年）「渋沢栄一の福祉思想－英国との対比からその特質を探る」ミネルヴァ書房

インターネット

朝日新聞（2010年6月18日）「ジュゴンの海，緊急調査へ」普天間移設の辺野古沿岸
http://www.asahi.com/eco/TKY201006180257.html（閲覧：2011年9月21日）

防衛省沖縄防衛局　辺野古資料「3.2社会的状況」
http://www.mod.go.jp/rdb/okinawa/kakubu/03ty-outatubu/junbisyo/12.pdf（閲覧：2011年12月4日）

防衛省沖縄防衛局　辺野古資料　第3章　対象事業が実施されるべき区域及びその周辺地域の概況
http://www.mod.go.jp/rdb/okinawa/kakubu/03ty-outatubu/zyunbiyouyaku/210402_7.pdf（閲覧：2011年12月4日）

普天間基地代替施設移設問題　Wikipedia
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%99%AE%E5%A4%A9%E9%96%93%E5%9F%BA%E5%9C%B0%E4%BB%A3%E6%9B%BF%E6%96%BD%E8%A8%AD%E7%A7%BB%E8%A8%AD%E5%95%8F%E9%A1%8C（閲覧：2011年12月4日）

沖縄ジュゴン訴訟判決文（2008年）UNITED STATES DISTRICT COURT NORTHERN DISTRICT OF CALIFORNIA 2008.1.24. http://earthjustice.org/sites/default/files/library/legal_docs/dugong-decision-12408.pdf（閲覧：2011年12月3日）

沖縄タイムス（2011年6月7日）「ジュゴン食み跡？大浦湾奥で初見」
http://www.okinawatimes.co.jp/article/2011-06-07_18854/（閲覧：2011年10月7日）

日本自然保護協会　http://www.nacsj.or.jp/katsudo/henoko/2010/06/-2010.html（閲覧：2011年12月3日）

日本自然保護協会　合同調査報告書（2009）「辺野古・大浦湾アオサンゴの海　生物多様性が豊かな理由」http://www.wwf.or.jp/activities/marine/lib/0904ooura.pdf（閲覧：2011年12月3日）

琉球新報（2007年8月14日）沖縄の「今」問い掛ける Cocco（シンガー・ソングライター）http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-26310-storytopic-6.html（閲覧：2011年4月20日）

DVD

The Pacific（2010）太平洋戦線を描いたアメリカのテレビドラマ　Warner Bros. Entertainment Inc.